

「おくのほそ道」MAPのポイント説明

一 “心細き長沼…” 現北上川の合戦谷付近（河北町）

明治44年から昭和9年にかけて改修された新北上川である。芭蕉等が旅した頃は、周囲の山々から集まった雨水が湿地帯をつくり、梅雨の時期でもあり、大小の沼が繋がって南北に長い沼となっていたのであろう。

二 「明耕院」の黒門と大榎木（津山町）

黒門脇の大榎木は推定樹齢約400年、芭蕉と曾良の旅姿も見守ったのではないと思われる。

三 北上川に水没した旧柳津町の風景 （明治43年撮影／津山町）

四 一関街道と東浜街道の別れの跡（津山町）

芭蕉と曾良、そして石巻の宿四兵衛と気仙へ行くもう一人の旅人と別れた跡が、この場所と言われている。

五 日根牛の舟渡し場（登米町）

当時、登米の渡し場は3ヶ所あったと伝えられており、芭蕉もこの舟場から川向こうの御城下へ渡ったと思われる。

六 芭蕉翁一宿の地・戸伊摩（登米町）

芭蕉と曾良が一宿した検断屋敷跡に建つ、河東碧梧桐の六朝風の書体の石碑（昭和9年9月、竹酔会建立）

七 庚申塔〔嶺鍛冶屋峠付近〕

八 嶺鍛冶屋峠からの下り坂古道（中田町）

旧北上中学校（現萩風園）裏の古道に建つ庚申塔で、この道を西へ行くと、再び北上川右岸堤防（相模土手）沿いの道になる。更に二人は、一関街道（国道342号）を北に向う。

九 相模土手の中段に立つ「お鶴明神」（中田町）

十 「おくのほそ道」芭蕉この道を通るの石碑（中田町）

中田町上沼、郷土の俳人・菅原胡麻が詠んだ句“この道を 北へ乃旅の 梅雨の笠”が、裏面に刻んである。（弥勒寺北参道口）

十一 奥の細道（上沼新田町）の標柱（中田町）

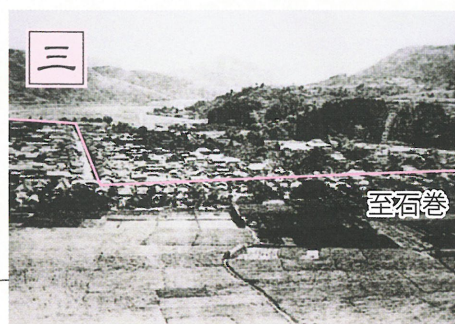
十二 伝説「鏡石の碑」（中田町）

「化粧坂」の名称の由来になった伝説で、その昔、ここを往来する人々が、ツルツルした石面に水をかけて鏡代わりにし、石の窪みに白粉を溶かし化粧をして通行したと云う。（最初に化粧した人物には、諸説あり）

十三 「化粧坂」（中田町）

この坂を下って北上川に向かって東進すると、源氏の守護神「上沼八幡神社」、そして奥州三十三観音の32番札所・大白山「長承寺」が有り、この坂を往来する人々は、身を整えて通行したのであろう。

明治43年に、北上川改修工事に取
り掛かる前年に撮影された写真で、
今は北上川や河川敷に水没した旧
柳津町である。当時の町並みは、
一関街道と東浜街道が交差する交
通の要衝で、芭蕉ら一行も歩いた
（写真の赤線）と思われる。



芭蕉翁一宿之碑（昭和9年9月建立）
芭蕉が宿泊した、検断屋敷の川側
に大榎木と、その下に小さな祠が
有り、お礼に短冊を置いていった
と言われている。堤防工事で今は
無く、この石碑のみが当時を偲
ばせている。

登米伊達家初代館主「白石相模守宗直」公は、
北上川治水工事に着手、工事は何度も堤防が
決壊する等難工事。伝承ではあるが、生き土
手としてその犠牲になった「お鶴」さんを祀
った明神様で、今も地域の方々が毎年供養し
ている。



5月11日（陽暦6月27日）曇り空の下、戸今
を発った二人は北上川沿いの崖道を北に向う。
更に嶺鍛冶屋の峠を越えて、上沼の住吉河岸
から北西方向に下り、上沼新田町に入る。既
に雨が降り出し長根町から「化粧坂」を登り、
一路平泉を目指す。

「おくのほそ道」登米市行脚の道しるべ

（発行）浅水ふれあいセンター（浅水公民館）
登米市中田町浅水字荒神堂150-2
TEL.FAX 0220-34-2008
Eメール asamizu@ec5.technowave.ne.jp

（企画編集）「おくのほそ道」330年記念委員会
代表 酒井 哲雄

（問合せ）株式会社 とよま振興公社
TEL 0220-52-5566
HPアドレス <http://toyoma.co.jp>

（イラスト）秋山 清人



「おくのほそ道」 登米市行脚の道標

明くればまた知らぬ道迷ひ行く。…
心細き長沼に添うて、
戸伊摩といふ所に一宿して、平泉に到る。



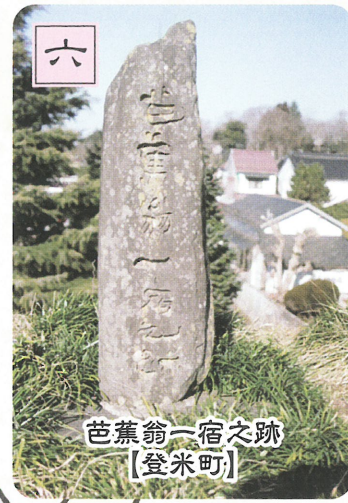
「おくのほそ道」
～登米市行脚から330年～



合戦谷【河北町】
(北細き長沼)



北上川の舟渡し場【登米町】



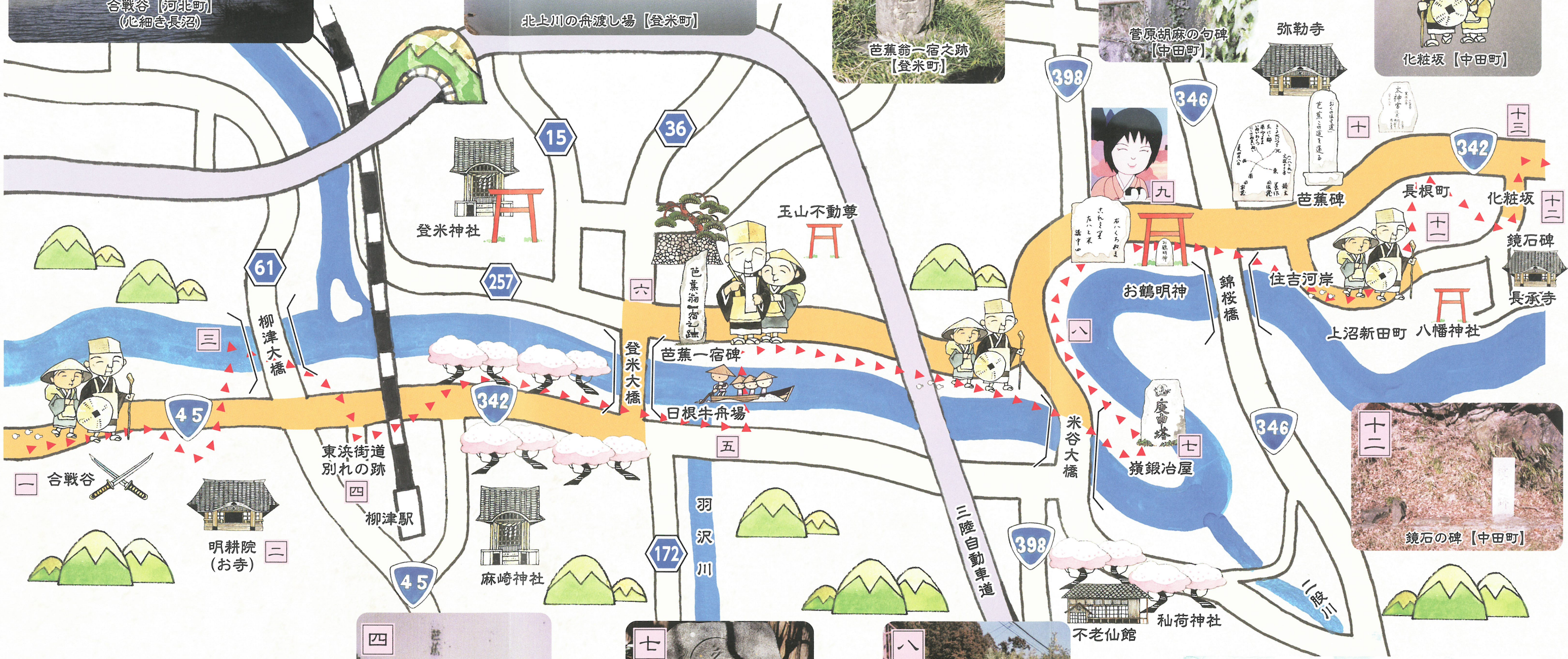
芭蕉翁一宿之跡【登米町】



管原胡麻の句碑【中田町】



化粧坂【中田町】



明耕院の黒門と大榎木【津山町】



芭蕉 宿四兵衛
別れの跡【津山町】



庚申塔【中田町】
嶺鍛冶屋峠付近



嶺鍛冶屋峠からの
下り坂古道【中田町】



関街道を
一路北へ…